

戦争、そして私たち家族

岡谷市長地 小口 陽子

もう遠い昔になるだろうか、昭和二十年、満洲遼陽に私たち親子五人は住んでいた。父母は親戚のアパート経営に参画して忙しい日々。当時、私はまだ八歳で記憶もさだかでないが、母から聞いた話などを紡ぎ合わせて書いておきたい。

家の近くに有名な白塔公園があり、美しいポプラ並木が続いていた。五歳の弟は軍歌「荒鷲の歌」を得意に歌いながら、リュックにおにぎりを背負い私と連れだつて公園へ遊びに行つたものだ。父母は末っ子であることも手伝つてか弟をとて可愛がつていた。

昭和二十年五月、四十二歳の父に召集令状がきた。明日集合との一枚の赤紙だつた。家族写真すら撮る間もない慌ただしい出征だつた。間もなく戦地から、家族写真を送つて欲しいとの便りがあった。が、父の出征の後、弟が麻疹を患い弱るばかりで、病気の写真を送つては父が心配するであろうと、母はその時は送らなかつたとい

う。まさか三カ月後に終戦、音信不通になろうとは想像だにしなかつた。

白塔公園の横を通り、弟に下駄を履いてもらいたくつて、兄と病院に行つた。弟は寂しげに「父ちゃん早く帰つてこないかなあ」としきりに恋しがつていた。やがて弟は家に帰つてきたけれど、終戦の八月、衰弱しきつて亡くなつた。母はだんだん体温のうすれていく弟に「ごめんね、ごめんね」と体をさすつて泣いた。私も冷たくなつていく弟に、正座して「さようなら」とつぶやくのがやつとだつた。

馬車に乗り焼場に向つた。母は玄関で手を合わせて見送つていた。青い空に薄い煙が溶けてそこに芙蓉の白い花が咲いていたのが忘れられない。それからだつた。母は遺骨の前に跪き、「自分が身代わりになればよかつた。いっぱい御飯を食べてあげたかつた。子供を亡くしてしまひ夫に申し訳ない」と自責の念に苛まされ、詫びて泣いている日々が続いた。私は寂しくてたまらず、私への母の視線が欲しくて、「母ちゃん、私だつて母ちゃんの子だよ」と母の肩をたたいて言つた。悲しみの底に迷い込んでいた母は、「そうだ、残された子供を守つていかねば……」と気がついたという。その時、母

は三十三歳だつた。

その頃、学校は爆撃とソ連の侵攻で閉鎖されていた。

あちこちで暴動の起こる騒がしい街頭で、兄はタバコ、私は母の作つたお饅頭を立売りして、生活の足しにと母を助けた。ある時、二人組の銃を構えたソ連兵が土足で侵入して来た。腕には幾つもの時計をはめており「出せ！」と言う。あるのは柱時計だけと指差して言つても、家中かきまわし、果ては弟の遺骨の中までガラガラとゆすつてさぐつた。逆らう術もなく、蒼ざめた母の姿があつた。

敗戦の明くる年、無蓋車に乗り何日もかけてコロ島に着いた。戦禍の後の大きな建物のコンクリート床に布を敷き、乗船の日を待った。その頃、肋膜炎を患つていた母は、リュックサックに弟の遺骨を入れていつも一緒だつた。やがて順番が来て、迎えの駆逐艦への乗船には、毛布にくるんだ大きな荷物を遅く担いだ十二歳の兄を先頭に母と私が続いた。兄がこの上なく頼もしかつた。そして船は真つしぐらに日本本土に向かつた。

引揚後、知人を頼つて南箕輪の果樹園の物置きを借りた。藁で囲んだ小屋生活で、冬になれば藁の隙間から雪が舞い込み、風呂敷を被つて寝た。母お手製のわらぶと

んの中で三人して父の行方を案じた。中学一年の兄が「帰らぬか冬の寒空父いづこ」と句をつくつたのもその頃のことだ。

母は隣駅の村の新聞配達をして働いた。降りしきる雪の日でも、遠くまばらな軒家へも雪をかき分け、濡らさないようこもを被つて配達した。ある時、母はうっかり間違えて二度集金に行つてしまひ激しく叱責され批難されたという。身なりこそ貧しかつたが、真つ正直な母。どんなに辛かつたか、子供の私に大きいため息をついてめずらしく弱音を吐いた。めげそうになる母は信仰をもつことにより自分自身を強く支えていた。私たちの横には、いつも父への陰膳が並んでいた。

その頃、村の診療所に管理人として入ることになり、兄と私は分担を決めて毎朝掃除してから学校に行く生活が始まつた。母が端布で彩りよくカバンや服を縫つてくれて学校へ行つた日、先生が「いい母ちゃんだな」とほめてくれた。嬉しくて恥ずかしくて、顔が真つ赤になつた遠い日……。母の優しさが身に染みだ。ないづくしの不自由な暮らしの中でも、母がいれば子供心に幸せて不足を思わなかつた。父の分まで見守り育ててくれた。人々の御親切と丈夫な体と家族の絆で、暮ら

しを拓いていけた。

父は終戦から十一年後、行方不明のまま中国の土となり戦死の公報が届いた。自木の箱に「英霊」と書かれた紙片が入っていた。どのような思いで、どのような様子で最期を遂げたのか、英霊となった父にただただ合掌することしかできない。

母は護国社神に参拝し、暮らしの中でも「おかげさま、ありがとうございます」と感謝する日々である。何事も耐え忍び、ひたむきに生きてきた母を尊敬し誇りに思う。

大きな力で、平和な暮らしも家族も壊し命をも奪ってしまうのが、戦争なのだ。なぜ戦争が起こり繰り返されるのか、難しい政治にも関心をもたねばと今更のよう

に思う。
戦後六十年を超え、今夢のような平和の日々。しかし、忘れがちな戦争の悲劇を歴史の中に葬り風化させてはならない。私たちの体験したことを語り継いでいくことこそが、犠牲となられた幾多の方々への鎮魂の祈りと強く思う。

可愛い孫子たちに平和を渡したい。

